

教育委員会定例会日程

令和 8 年(2026年) 6 月 24 日

1 開 会

2 前回議事録の承認

3 議事録署名委員の決定

4 議事

日程第 1

議案第 18 号 小田原市就学支援委員会委員の委嘱について (教育指導課)

5 報告事項

(1) 小田原市社会教育委員会議活動報告書について (資料 1 生涯学習課)

6 閉 会

議案第 18 号

小田原市就学支援委員会委員の委嘱について

小田原市就学支援委員会委員の委嘱について、議決を求める。

令和 8 年 6 月 24 日提出

小田原市教育委員会

教育長 柳下 正祐

小田原市就学支援委員会委員名簿

任期：令和 8 年 7 月 1 日～令和 9 年 6 月 30 日

No.	選 出 区 分	氏 名	所 属 等
1	医 師	松田 基	小田原市立病院 副院長
2	〃	寺崎 雅子	小田原市産業医
3	〃 再	伊藤 淳	湘南鎌倉総合病院小児科 医師
4	学識経験者	小倉 直子	小田原短期大学 保育学科 准教授
5	〃	田中 早苗	心理判定員
6	〃	小松 智代	心理判定員
7	〃 新	北川 誠	小田原市立千代中学校 校長
8	〃	山本 礼子	小田原市立片浦小学校 校長
9	本市を管轄する児童相談所の職員 新	米山 実来	児童相談所子ども相談課 主任主事（児童心理司）
10	本市の区域内に存する特別支援学校の 教員 新	古賀 陽子	神奈川県立小田原支援学校 総括教諭
11	特別支援学級を設置する小田原市立小 学校の校長	楠 喜久子	小田原市立大窪小学校 校長
12	小田原市立中学校の校長 新	川崎 和美	小田原市立国府津中学校 校長
13	小田原市立小学校又は中学校の教員 で、特別支援学級を担当するもの 新	赤松 陽子	小田原市立豊川小学校 総括教諭
14	〃	森本 圭	小田原市立町田小学校 教諭
15	〃 新	佐々木綾子	小田原市立城山中学校 教諭
16	教育委員会が必要と認める者	小出 有夏	小田原市立富水小学校 総括教諭
17	〃	古瀬 薫	障がい福祉課 係長
18	〃	坂場 美奈	子ども若者支援課（つくしんぼ教室）係長
19	〃 再	高柳 和伸	子ども若者支援課 子ども健康係 主査
20	〃 再	本田 亜紗美	子ども若者支援課 子ども若者相談係 主任
21	〃	長崎 みき	教育指導課 特別支援教育相談員
22	〃 再	村田 久美子	教育指導課 教育相談員
23	〃	早川 裕子	コミュニケーションの教室「フレンド」 教諭
24	〃 再	岩瀬 智子	ことばの教室 教諭
25	〃	橋本 賢治	教育指導課 教育相談担当課長

※ 無印は再任委員候補のうち前任期（令和 7 年 7 月 1 日～令和 8 年 6 月 30 日）に委嘱または任命

※ 再は再任委員候補のうち前任期（令和 7 年 7 月 1 日～令和 8 年 6 月 30 日）より前に委嘱または任命

※ 新は新任委員候補

生涯にわたる学びとの出会いと学びの継続、つながりの支援について
～生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し～

— 活動報告書 —

令和8年5月

小田原市社会教育委員会議

目次

はじめに	1
1 協議の進め方について	1
(1) テーマ	
(2) 協議の視点	
(3) 協議対象	
(4) 協議のまとめ	
2 各事業の現状と課題及び協議経過	5
(1) 学習講座・学習情報・学習相談・人材バンク事業（キャンパスおだわら）	
(2) サークル・団体の支援、地区公民館支援	
(3) 家庭教育学級・PTA研修	
3 協議を受けての事業展開について	17
(1) 市民ニーズの把握	
(2) 若年層を意識した企画の検討	
(3) 子ども向けイベントの拡張と親も楽しめる仕掛けづくり	
(4) 「愛着」の醸成・「郷土教育」の充実	
(5) 多様性を尊重した交流型・体験型の学びの実現	
(6) 「地区公民館」を利用した地域教育の可能性（「縁側」のような場所）	
(7) 「学校」をフィールドとした地域教育・家庭教育支援など	
資料	20～22

はじめに

小田原市社会教育委員会では、令和4年度から令和6年度の2年間の任期において「新しい生活様式を踏まえた社会教育・生涯学習のあり方とその可能性」というテーマで、コロナ禍を経た新しい生活様式を前提としながら、より良い学びの実践につながるようなアイデア、意見等を協議することにより、社会教育・生涯学習の可能性を探った。この2年間における社会教育委員会での活動報告については、市教育委員会を通じて教育振興基本計画の関係所管へ市の施策等への反映を働きかけた。

この協議の中では、多角的な視点からアイデア・意見が出されたが、その中で、コロナ禍を経て再開した活動に加え、デジタル技術を活用した個々による学びの機会は増えつつも、一方で、人と人とのつながりが希薄になっていくことの懸念なども指摘されたところである。

そこで、令和6年度から令和7年度にかけては、今一度、全ての人に生涯にわたる学びとの出会いの機会をどのように提供するのか、出会うことのできた学びを継続していくにはどうしたらよいのか、学ぶことを通じて知り合った仲間や、学びを深めることで出会う人とのつながりを支援していくにはどのようにしたらよいのか等、生涯学習活動を支援するに当たっての諸課題について協議するべきと考えた。その結果、「生涯にわたる学びとの出会いと学びの継続、つながりの支援について」～生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し～をテーマに協議を重ねていくこととした。

1 協議の進め方について

(1) テーマ

生涯にわたる学びとの出会いと学びの継続、つながりの支援について
～生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し～

(2) 協議の視点

協議を行う際の視点について、「出会い」「継続」「つながり」「活かす」の4つのキーワードを抽出し、設定した。

ア 学びとの「出会い」の創出

- 最初に学びに出会うとき、興味や関心を高めてもらうにはどのように支援したらよいか
- 年齢や心身の状態にかかわらず、すべての人に学びとの出会いの機会を創出するためには何が必要か
- 学ぶ余裕のない、働く世代、子育て世代への学びの機会を作るためには何が必要かなど

イ 学びの「継続」の支援

- 出会うことができた学びの「継続」をどのように支援するか
- 学びの成果を評価して、継続を促していくような仕組みをどのように作るかなど

ウ 学びを通しての「つながり」の支援

- 学ぶことを通して知り合った仲間との「つながり」をどのように支援するか
- 学びを深めるため大学など他機関との連携をどのように考えるか
- サークルやグループの形成を促進するにはどのような支援が必要か
- サークルやグループ同士の連携について
など

エ 学んだ成果を「活かす」支援

- 学んだことを個人の自己実現で終わらせず、まちづくりに活かすには何が必要か
- 一人ひとりが持っている学び（読書やスポーツ等）の楽しさを広く伝える方法について
など

（３）協議対象

協議対象は現行の生涯学習センター事業とした。

【事業の概要は次ページの別図のとおり】

事業の現状や課題を把握した上で、事業別に協議し、協議内容を事業に反映することによって「生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し」を実現していくための事業展開につなげていくこととした。

なお、地域資源を活用した長期的・体系的な学びの場である「おだわら市民学校」については、令和７年度に策定する第７次小田原市総合計画の中でこれまでとは大きく位置付けが変更となるため、協議対象から除外することとした。

生涯学習センター事業

1 学習講座・学習情報・学習相談・人材バンク事業（キャンパスおだわら）

- 学習講座の提供…小田原市内で実施されている生涯学習講座を収集、一元化して学習講座情報を提供、学習講座の開催
- 学習情報の発信…キャンパスおだわら情報誌、自分時間手帖、ホームページ
- 学習相談…学習の機会・方法・施設・教材・人材などに関する情報を提供
- 人材バンク事業…教えたい人（キャンパス講師）と学びたい人を繋げる制度
「夏休み子どもおもしろ学校」
「キャンパス講師による1日体験講座」など

2 サークル・団体の支援、地区公民館支援

- 学びの場の整備…生涯学習センター本館、国府津学習館の施設管理、運営
- サークル・団体の支援…生涯学習センター認定団体制度の運営
生涯学習フェスティバルの開催
- 地区公民館支援事業…小田原市公民館連絡協議会事務、公民館大会の開催、地区公民館いきいきフェスタの開催、公民館講座の実施、地区公民館に対する補助金事業（活動費補助金・建設費、修繕費補助金）、地区公民館へのWi-Fi設置

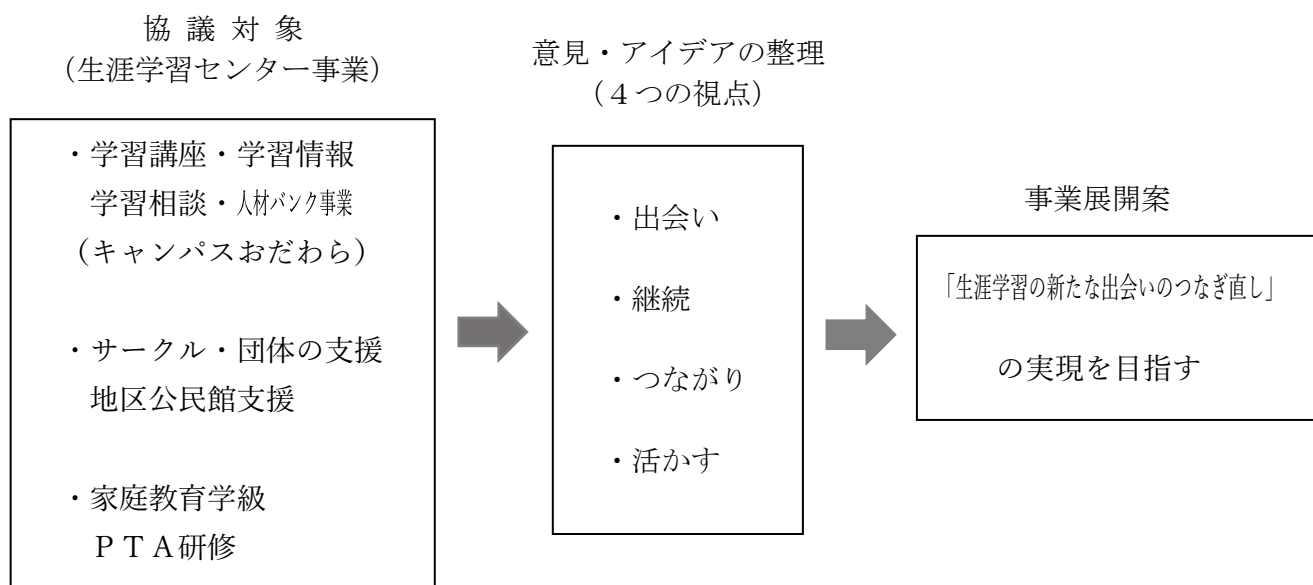
3 家庭教育学級・PTA研修

- 家庭教育学級…幼稚園や保育園、小中学校で行われる入園、入学前説明会の機会に、講師を派遣し、家庭教育の重要性を啓発する講座等を開設
- 家庭教育講演会…年1回、専門家による講演会を開催
- PTA研究集会…市内小中学校のPTA役員等を対象に、PTAが直面する課題など研究・討議（年1回開催）
- PTA広報担当者研修会…PTAで広報活動に携わる方が対象・広報紙の編集技術やPTA活動における広報の意義を学習する機会を提供
- PTA成人教育等担当者研修会…PTAで成人委員等、PTA会員の研修会活動に携わる方を対象に、市の諸制度の紹介、研修会等の開設の意義・手法を学習する機会を提供

(4) 協議のまとめ

前任期の社会教育委員会では、「新しい生活様式を踏まえた社会教育・生涯学習のあり方とその可能性」というテーマで協議を重ねた上で、協議内容を伝える「活動報告書」を作成した。今期の協議においても、現行の生涯学習センター事業の事業ごとに協議を繰り返し、委員からもそれぞれの立場から自由かつ多様な意見等が寄せられた。したがって、各事業の現状と課題及び協議経過については、各委員の意見やアイデア等をシンプルに伝える形式とするとともに、協議を踏まえた事業展開案についても、これらの意見等を土台として委員からの提言としてまとめた。

【まとめ方の概要】



2 各事業の現状と課題及び協議経過

社会教育委員会会議においては、現行の生涯学習センター事業ごとに事業説明を行い、事業の現状や課題を提示した上で「4つの視点」に基づき協議することとした。その結果、各委員から様々な意見・アイデア等の提言があった。

なお、意見・アイデア等の中には、「4つの視点」のいずれかに単独で合致するもののほか、複数の視点の要素を含むものも多いため、そうした複合的な意見・アイデアについては、ある程度大きな括りの中で掲載した。また、生涯学習センターの3つの事業のうち、複数の事業にまたがる意見・アイデアについては「(4) 複数の事業に共通する意見」として別途項目を設けて記した。

事業ごとの現状と課題及び協議経過については、次のとおりである。

※別紙「資料」として、【「4つの視点」ごとの意見・アイデア（まとめ）】を添付したので、併せてご覧いただきたい。

(1) 学習講座・学習情報・学習相談・人材バンク事業（キャンパスおだわら）

ア 現状と課題

No.	事業内容	現状	課題
1	学習講座	「キャンパスおだわら」として小田原市内で実施されている生涯学習講座を収集、一元化して情報提供することで、まちじゅうキャンパスの実現を図る。 【市主催の学習講座】 ・市主催の学習講座（生涯学習課・各所管課主催講座、出前講座） 【市主催以外の講座】 ・市民主催（公募型市民企画講座・キャンパス講師が行う講座） ・企業主催の学習講座 ・教育機関の学習講座（市内大学公開講座・県立生命の星地球博物館・美術館等）	・民間が開催する講座と比較して、行政が行うべき生涯学習講座とは、どのようなものであるべきか（民間ではできない分野、小田原独自のもの等）。 ・全ての人に生涯にわたる学びとの出会いの機会を提供するには、様々な世代のほか、ハンディキャップのある方など、これまでアプローチが不足していた層への支援をどのように行っていくか。 ・学びや活動との出会いにおいて、最初の一步を踏み出すことに対するハードルをどのように下げるか。 ・キャンパス講師主催の講座が、より一層開催されるためには、どのように働きかけていけばよいか。 ・生涯学習課主催の講座をさらに充実していくために市民ニーズの把握を含めどのような工夫が必要か。 ・郷土に対する誇りや愛着心を醸成するための講座をどのように拡充するか。

2	学習情報	・チラシ配架 ・情報誌の発行【自分時間手帖、キャンパスおだわら情報誌】 ・ポスターの掲示 ・ウェブサイトへの掲載	・多くの人に情報が届くようにするには、民間を含めて広く行われている生涯学習講座の情報をいかに把握し、発信していくとよいか。 ・講座・イベントなどの情報をさらに広げるにはどのような工夫が必要か。 ・デジタル化が進む一方で、多くの高齢者が紙媒体による情報提供を望む。情報媒体についてどのように考えるか。
3	学習相談	学習の機会・方法・施設・教材・人材などに関する情報を提供する。 (相談対応) ・学習ニーズの把握 ・選択肢を提示 ・コーディネート	・相談者のニーズに応えるための収集方法をどのように考えるか。 ・学習相談担当者のスキルアップをどのように図っていくか。
4	人材バンク	・キャンパス講師登録 ・名簿管理、運用、実施状況管理 ・登録者活用、登録者研修など ※人材バンク事業 ①「夏休み子どもおもしろ学校」 → キャンパス講師が小学生向けに講座を用意し、学校とは違う環境の中で楽しく学ぶ場を体験してもらい、講師の活躍の場、小学生の生涯学習の場を提供する。 ②「キャンパス講師による1日体験講座」 → 対象を限定せずに実施。	・「夏休み子どもおもしろ学校」は、参加希望者が多く、人気の講座は抽選になってしまう。 ・「1日体験講座」は、生涯学習のきっかけ作りとして開催しているが、その後のフォロー・サポート体制の仕組みづくりが必要ではないか。

イ 意見・アイデア等（「4つの視点」ごと）

（ア）「出会い」

- 生涯学習は動機付けが大切である。子ども対象の事業については、親も面白そうだと思うような動機付けがあると良い。子どものころによくデパートに行っていた子どもは、大人になってからもよく行くと聞く。子どもの頃からの経験が大切だと思う。
- 講師の方の高齢化が進み、講師の育成に穴が生じている。
- 今後は、特に若年層、中年層を対象にした事業展開に注力してはどうか。
- 中年層に対しては、小田原で働いている人、起業している方を巻き込み、働いている人が参加しやすい仕掛けづくりが必要である。
- キャンパスおだわら情報誌はメニューも豊富で良いものだが、主に電話による申し込み方法を改良してもよい。
- 以前聞いたことがあるが、「丸の内朝大学」というのは朝7時から8時30分までオフィスで働く人を対象に勉強してから働くというものがある。「朝活」の導入によって働いていても参加したいという人の裾野がひろがるのではないか。
- 宇都宮市では、働き盛り世代を対象とした「宮の朝活」という教育委員会主催の事業があ

り、そこでは有名な起業家の参加もあり、そうした起業家に会いたいといった人が集まっているようだ。

- 自分時間手帖だけではイメージがしにくい。顔が見えてこない。どういう人たちが学んでいるかわからないので、発信していくことで変わるのではないか。

(事務局補足)

冊子の弱点については、市では、生涯学習の間口を広げ、やってみたいといった人への機会をつくるよう、例えば「キャンパス講師 1 日体験講座」を開催している。実際に、令和 6 年度開催の「イタリア語講座」では、先生の教え方やお人柄に触れることで、講師が主催する別の教室につながっているという例がある。

- 若い人は、持続性というより単発が好きなのだと感じる。飽き性でいろいろやってみたい方もいる。人材バンク事業も、時によっては一日体験など開かれたサークルであるといいのではないか。学校のコミュニティスクールとの絡みで、学校で、例えば二部屋だけを借りて行うとか、キャンパス講師による仕掛けでも良い。

(イ)「継続」

- 持続可能性、継続性という観点では「愛着」を持つことが学習意欲を継続させるための原動力となる。まずは知ること、交流することでの気づきもある。そうしたところから実践家として地域づくりの人材育成につながっていく。
- 小田原は歴史も自然も食べ物もあり、風光明媚で良いものが多い。それを市民全体で共有していくと良い。小田原を深く知ることが郷土愛、小田原愛につながる。子どものころからそうした学びがあれば、ここに住んでいて良かった等、愛着の第一歩になる。そうした郷土教育を長期的に行う必要がある。
- 郷土教育の材料として、市内の歴史的建造物を含めた小田原城などがある。また、有名なパン屋さんや蒲鉾などの食べ物でも良いと思う。郷土教育の材料としては、歴史や自然だけでなく、「地域での生活」という観点でも価値はある。
- 子ども向けイベントは、けやきのイベントとして、単発ではなく、ある程度期間を長く設定して開催すると良いのではないか。
- 1 日体験講座については、全く初めての参加者を次の参加につなげるためには講座での上手な宣伝が必要である。講師に宣伝の方法をあらかじめ伝えておいたり、参加者には興味があった場合のアクセス方法を投げかけるなど、講師と参加者の双方へのフォローがあると良い。
- 人材バンク事業の課題としては、講師と参加者のマッチングの問題がある。また、講師として登録してもなかなか声がかからないということもある。講座の情報量が少ないと参加者と講師のミスマッチが生まれやすい。それを埋める努力として、例えば、講座を紹介する動画を作るなども良い。

(ウ)「つながり」

- 体験学習が「1 日体験」だけで終わってしまうのはもったいない。同じ講師による講座の紹介や関連講座など、次につながる情報発信があると良い。
- 杉並区では「すぎなみ大人塾」という、「自分を振り返り、社会とのつながりを見つける大

人の放課後」をキャッチフレーズにした事業がある。阿佐ヶ谷、高円寺、荻窪など、それぞれグループを作っていて、年1回の「大人塾祭り」という報告会があり、どういうことを学んだかを全体で共有している。模造紙や写真などを掲示して、市民の方たちにも見せている。それを見た人が面白そうだな、入ろうかな、と思ってくれるような動きにつながるかもしれない。冊子だけの情報提供ではわからない部分も多くある。**参加団体が一堂に会してイベント化することで、団体同士の情報共有の場をつくることも一案である。**

(エ)「活かす」

- 講座の企画を団体主導により行っている自治体もある。団体側で企画書をプレゼンし、委員が審査、合格した者には場所や広報のみ提供し、あとは全部団体にやってもらうものである。これを小田原市で実施するとした場合、**小田原ならではの「郷土」など条件づけして絞れば、エントリーの可能性はある。**
- コミュニティスクールでは、土曜日のグラウンドや教室を使った「土曜日学校」というものもあった。また、空き教室を地域に開放している学校など学校ごとに独自性も出ているようだ。

(2) サークル・団体の支援、地区公民館支援

ア 現状と課題

No.	支援内容	事業	課題
1	サークル・団体の支援	【学びの場の整備（施設管理運営）】 ・生涯学習センター本館 ・生涯学習センター国府津学習館 【サークル・団体の支援】 ・生涯学習センター認定団体 ・生涯学習フェスティバル	・生涯学習センターの利用率を上げるにはどのような工夫ができるか。 ・フェスティバル来場者を次回フェスティバル参加につなげるには、どのような仕組みを作ると効果的か。 ・生涯学習活動団体の活動を後押しするために、認定団体制度における優遇措置のほかに、何か有効な手立てがあるか。 ・活動団体数が減少している中、学びを通じて人と人とのつながりや関わりを作り出し、活動へとつなげるために講座開催や学習情報、学習相談の充実が必要と考えるが、具体的にどのように展開すべきか。 ・既存団体の持続可能な活動につなげるためには具体的にどのような支援が必要か。
2	地区公民館活動支援	【小田原市公民館連絡協議会】 【公民館大会】 【地区公民館いきいきフェスタ】 【公民館講座の実施】 【地区公民館に対する補助金事業】 【地区公民館への Wi-Fi 設置】	・市公連加盟館長の高齢化が進む中、市公連で行っている活動のマンパワー不足をどのように解消していくか。 ・公民館大会で優良公民館役員等を表彰しているが、受賞辞退者などによる受賞者の減少や大会参加者の減少などの課題があり、公民館大会の今後のあり方を再検討する必要がある。 ・地区公民館いきいきフェスタの参加者が固定化しているため、新しい参加者を増やすための効果的な方法があるか。 ・地区公民館いきいきフェスタは一般市民にも広く来場を促しているため、地区公民館に関わりの少ないと思われる方々の来場も多く見受けられるが、そのような方々の地区公民館での活動に繋げる有効な方法があるか。 ・災害時対応のために地区公民館に設置された Wi-Fi ではあるが、通常時の利活用が進まない館があり、今後、どのように利活用を促すかに課題を感じている。

イ 意見・アイデア等（「4つの視点」ごと）

（ア）「出会い」

- 事業の参加者が高齢化、固定化していることについて、**子どもの社会力を育てる**という点も含めて突破口はないかと考えた。多くの方はお祭りが好きなので、例えば、フェスティバルのためのブースを学校の生徒たちに区画をもってお店を持たせ、準備するように促すことで子どもたちが参加できる取り組みになる。従来型の組織の体制、フェスティバルのやり方ではなく、**新規の方の参画、子ども参画、若者参画という視点**でやってみる必要がある。**子どもたちへの自信**にもつながると考える。
- マネタリーの導入**も一案である。お金が介在することでインセンティブが高まる。素晴らしい展示物があると、欲しい、買いたいという気持ちになる。フリーマーケットや手作り市のように、サークルの人たちが持続的に活動でき、展示物を販売するなど、お金が介在する取り組みを入れていくことで、学び、活動、人を集めることもできるのではないか。コミュニティビジネスになるが、見る、展示、学び合うだけでなく、**見本市とか、手作り市などはとても人が集まるので、試験的に導入するのも一案ではないか。**
- 今後の課題として、**障がい児、病児、医療的ケア児、障がい・病児きょうだい児である子どもたちが参加できるような工夫**はないかと考えた。非言語コミュニケーション、多様なコミュニケーション力、引き込み力、寛容な社会力、健常者との関わり方など、新たに作るのではなく、**いままで作ってきたものに加えて、彼らの必要なこと、その子たちがトライしたいと思ってきたことをトライできるサポート**ができるのではないか。関係各課が連携した事業などは今後の検討課題になると思う。
- 障がいのある方の学習の一例として、民間のNPO法人が行っている「**りんごプロジェクト**」という事例がある。「りんごの棚」と呼ばれる書籍コーナーに目の不自由な方が訪れ、点字での検索や、録音図書の利用ができるようになっている。少しの工夫でハンデキャップを持つ方の学びのハードルが下がることもありうる。
- 東大医学部の熊谷先生は車椅子の先生で、一般の人に、理屈ではなく手足が不自由な状態を体験させる、**当事者を体験するワークショップ**を社会教育の授業として行っている。
- 明確な目標があると参加しやすい**と思う。研修会や勉強会では「こういうことが学べる」というだけであると「どうして行かなければいけないか」が見えない。「このような目標をこのように達成するためのもの」というような、研修等を受けるに当たっての明確かつ具体的なテーマが示されることで「私も皆と一緒にやっていこうかな」と思える。
- 事業の主催をする側としては、参加者の年齢層や市内外の別などの詳細データがあると、新規の方、新住民の方たちも入っていきやすいような戦略作りになるし、小田原の魅力づくりにも役立つと思う。**参加者がどのような方たちなのか「知る」「捉える」こと、「見える化」**することによって社会教育事業の価値も高まる。
- 何かを学ぼうとするときに**インターネットで探す人が多い**。地域でのネットワークを持った長く住んでいる方は違うかもしれないが、多くの市民は探し方がわからないのではないだろうか。インターネットで探す場合の分かりやすい入口のようなものがあると良いと思う。
- 地域の**地区公民館にキャンパス講師を呼ぶなど、地域と講師のマッチング**をしてもらえると、地区公民館の活動の幅も広がるし、地域としても喜ぶと思う。

(イ)「継続」

- 生涯学習フェスティバルは、舞台発表が多いという印象である。子どもを連れて家族で行った場合に、例えば、太鼓を叩いているのをただ見るのではなくて、実際に叩いてみるなどの体験型を増やせば次につながっていくのではないかな。

(ウ)「つながり」

- 昔、各地では、公民館からその地域に住んでいる女性に月 1 回講座があるから公民館に来てください、という声掛けがあって、それが婦人会の原点になった部分がある。女性同士で話すことで、自分が家の中で置かれている立場が客観的に見え、家の中で見えなかったものにいろいろ気づくことがあった。その気づかせることが社会教育の役割になっている。講座といっても、単なる茶飲み会のようなものだが、「教える」「学ぶ」というものは、知識やスキルを身につけるだけでなく、自身のことに気が付くとか、やる気が出るといったことも社会教育が目標にしていたところである。
- 地区公民館は事業をやる場所というほかに、何か「縁側」のような場所であって欲しいと思う。生活の中でくつろげる場が各地区にあったら良い。飲食しながら防災の話をするなど、食べ物も大事なツールになると思う。
- サークル・団体の今後については、既存団体の活動への支援が課題となっている。既存団体に誰かが入るとなると、年代も異なるなど難しい部分が出てくる。ミドル世代の方々が新規で仲間も作れるようなプチ講座のようなものがあると良いのではないかな。
- 子どもの社会参加についてだが、子どもたちはゲームやSNS、バーチャルにはまっている子が多くなっているので、社会とのつながりを持たせるには工夫が必要となる。殻を破るための一案として、子どもと大人の仲介役として「大学生」がいることで子どもが生き活きと活動したことがある。
- イベントの在り方として、単純に「踊る人」と「見る人」という線的な関係だけではなく、例えば杉並区の「すぎなみ大人塾」のように、一堂に会して、見本市というか、あるブースの人が別のブースの人にちょっかいを出すというような、いろいろ混ぜこぜに立体的にしていくと、思わぬ価値やアイデアが生まれたりしておもしろいのではないかな。
- 小学校では、インクルーシブの考え方を全校児童で理解し合うということを朝会や集会でやっており、障がいを持つ子どもたちが平等に参加できないことに対し、どれだけ社会が歩み寄れるかというところがベースになっている。
- ハンディキャップを抱えた人たちをどう引き入れていくかについて考えた。障がいの程度の重い方が同じ場所で同じように楽しめるかについては、そのご家族も含めて難しい面もあると体感したことがある。一緒の場所で一緒に楽しむだけが「ともに」ということではないということを感じたこともある。一緒にやる、その場所だったら楽しめる、そういうものをミックスしながらできるといいのではないかな。
- 働き方改革以降、学校と地域との関わりが薄くなりつつあると思う。学校側と地域の人たちで捉え方の違いがある。
- 学校の中における社会教育団体として、吹奏楽団体が 2 団体、土、日、休日に学校を使って熱心に練習をしており、社会教育における地域の資産であるといえる。それが、学校の吹奏

楽部と繋がるようになれば、いままで無かった新たな学校としての関わりも生まれてくる。

(エ)「活かす」

- 地区公民館については、何かあったときに地域の皆で過ごす場所になる場合もあるので、**地区公民館と危機管理をつなげたイベント的なものがあれば良い。**
- 地区公民館にキャンパス講師を招いて講座を行うことに対する補助金の制度がある。**地域と講師のマッチングの制度があると、地区公民館の活動の幅が広がり、地域も喜ぶ。**
- 地区公民館については、地区公民館と生涯学習センターは同列ではなく、それらの社会的役割は違うものと捉え、例えば飲食など、**地区公民館については良い意味でルーズな部分があって良い**と思う。田舎の公民館でフリーマーケットに参加したことがあるが、わいわいがやがやと人が集まりおもしろい。地区公民館についても、**住民べったりではないところからも発想すると良いのではないかな。**
- 子どもたちを活動や支援にどう主体的に参加させるかという課題がある。昨年度勤務していた施設では、大きな行事において子どもたちが実行委員として参加し、その結果、子どもたちは自ら積極的に取り組むことで達成感を得て、他の場面でも交流や参加を希望するようになった。**子どもたち自身が主体者となって作り上げる行事**を企画することも有意義である。
- イベントに訪れた子どもや親子がお客さんにならないように、イベントを実施する際に、例えば、お手伝い券のようなものを渡し、30分間活動のお手伝いをするというボランティアをそのイベントの中で実施するという事例があった。準備する側とお客さん側という雰囲気になりがちで、行政側もサービスを提供する側になり過ぎる部分がある。イベントの中に小さなボランティアをいっぱい準備しておいて、ただ参加するだけではなく、イベントの中でチラシを配るなどの簡単なボランティアを準備するなどの体験を準備するということがとても必要である。

(オ) その他・複合的なもの

- 子ども会やPTA、自治会活動に参加してきたが、確かに役割を担うことの大変さもあった。業務の整理をしていくとか、活動を整理していくという考え方は、今の時代、働き方も含めて即している。**何を残し、何を拡げていくのかということを検討しても良いのではないかな。**
- 障がい児の子ども教室では、子どもたちは普通に受け入れるが、むしろ保護者の理解が大事である。サポートする世代の側の育成が必要である。急に「サポートに入ってください」といわれても、**何をどのようにサポートすれば良いかが分からず戸惑ってしまうので、親世代の勉強や「体験」の何かがあると良い。**
- サークル・団体支援の「活動団体数が減少している中、学びを通じて人と人とのつながりや関わりを作り出し、活動へとつなげるために講座開催や学習情報、学習相談の充実が必要と考えるが、具体的にどのように展開すべきか」に関し、子育て広場についての例を紹介したい。子育て広場のミニ演奏会にオカリナグループの方を呼んだ。未就園児の前での演奏は初めてで、わくわくしたと話されていた。子どもたちひとり一人に手作りのマラカスを用意し、オカリナの曲に合わせて一緒に歌い、踊り、楽しい時間を過ごすことができたとのことであった。**活動へとつなげるためには、さまざまな活動の場を提供し、活動の場を広げ**

る手助けが必要と感じた。日ごろの練習の成果をいろいろな場面で発揮できれば活動も充実し、人と人とのつながりも自然と生まれるのではないかと思う。

- 小田原短期大学との連携で、毎年、子育て広場で学生ボランティアを受け入れている。同広場で行われる七夕祭りにおいて、学生が授業で製作した七夕の製作物を子どもたち全員にプレゼントする。作品に対するアンケートをお願いし、今後の学習に役立ててもらおうというもの。まず、大学生など若い世代の方々に小田原にはたくさんの地域子育て広場があることを知ってもらい、ボランティアとしてサポートに入ったり、プレゼントを製作したりすることで、子どもたちのために自分でもできることがあることに気づいてもらいたい。将来的には子育てサークルを支える力になってもらえればありがたい。若者世代の活躍が少ない中、学生での貴重な体験を生かし、今後の「学び」につながるきっかけ作りになると思う。

(3) 家庭教育学級・PTA研修

ア 現状と課題

No.	支援内容	事業	課題
1	家庭教育学級	【家庭教育講演会】 【家庭教育学級】	・コロナ禍を経て活動内容や組織の見直しが行われ、その影響で、家庭教育学級を開催しない団体が散見される。そうした団体に向けて開催を促す有効な手立てがあるか。 ・参加者の満足度は高いが、参加者の増加につながらない。対象者に対しての働きかけをどのようにすればよいか。 ・家庭教育支援を充実させるために、この事業以外の取組は考えられないか。 ・講師料について、1団体年間16,000円、合同開催30,000円の上限は利用しにくいとの声がある。講師料として適切な金額はどの程度か。 ・教育部との連携、テーマ・講師選定・準備・分担等の在り方。
2	PTA研修	【PTA研究集会】 【PTA広報者研修会】 【PTA成人教育等担当者研修会】	・参加団体・参加者を増やす有効な方法があるか。 ・家庭教育学級につながるようPTA成人教育等研修会の内容の見直しを行いたいが、どのように改善したら良いと思うか。 ・PTA活動を活性化させるための事業として、他に考えられるものはないか。

イ 意見・アイデア等（「4つの視点」ごと）

(ア)「出会い」

- 家庭教育講演会や家庭教育学級については、子どもも一緒に参加できるようにすると間口を広げることができるのではないかな。
- 各学校では、地域とのつながりで講師を選定し、招いているところも多いと思う。こうした講師の方に関する各学校の情報を知ることができれば良いと思う。
- 働く親にとっては、家庭教育、PTAともに、孤独感や悩みは深刻になっている。そういった悩みに寄り添うような家庭教育支援のあり方や、子どもたちに「もっとこういうことをさせられたら良い」ということへのイノベーションを段階的に考えていく必要がある。
- PTAの広報担当者研修会や成人教育等担当者研修会について、研修内容のアーカイブ化や、それを学校ごとに配布し、各学校で役員等が活用できるようにすると良い。

(イ)「継続」

- 講師料軽減対策としてきらめき出前講座の活用も一つの方法ではないかな。
- 千葉県松戸市の例がある。小学生の保護者同志が家庭教育のあり方について、学校と連携

しながら学年の枠を超えて話し合うというもので、保護者が学校に来なければならないタイミングを見つけて 15 分から 20 分の短時間で行う。このような取組を行政主導で学校ごとに順次行くと良いのではないか。子どもが朝から晩までゲームをしたり、引きこもってしまうなど、親の悩みはつきない。こうした取組は、そういう悩みに対してのひとつのアプローチになるのではないか。

- PTA活動で人が足りない状況については、スクールボランティアに協力を求めるのも一つのやり方である。地域の方も含めて皆で子どもたちを見守る姿勢が大切だと思う。

(ウ)「つながり」

- 地域の方とのつながりということでは、学校運営協議会は地域の方が多く来ており情報交換の意義が大きい。
- 「防災」は地域にとっての大きな共通課題であると思う。例えば、防災訓練を小中学校の防災教育等とコラボしてやっていけば、対象者の間口も広がり、市民の関心も高まるのではないか。面識のない人と一緒に何かに取り組むというのはハードルが高いが、1 回でも会ったことのある人やどこかで見かけたことがある人であればハードルが下がる。防災訓練がそうしたきっかけづくりの場になれば良いと思う。
- 地域の育成会の方が素晴らしい講師を招いて授業を実施しているが、子どもたちだけではなく大人にもぜひ聞いてもらいたい内容である。保護者にも参加を呼び掛けていくことで、学校をフィールドとして行われている講演会等を活用して成人教育をカバーしていくこともできると思う。

(エ)「活かす」

- 中学生がボランティアで地域の健民祭や敬老会に参加することも多い。チャンネルさえあれば中学生が地域の活動を支えることが可能だと思う。
- 家庭教育については、地域でサポートしながら保護者や子どもたちに声をかけていくような地域ぐるみの取組が大事である。そうした環境の中で育ってきた子どもたちが、大人になったときに地域ぐるみで子どもたちの面倒を見ていけるような人材になっていくと思う。
- 家庭教育学級では、移動型プラネタリウムが体験型で有意義であった。「楽しかった」という記憶や思い出が次世代への教育につながっていく。

(オ) その他・複合的なもの

- PTA研修事業には 20 年ほど前に関わったことがあり、当時は活気があった。最近は活性化が難しく負担が少ないよう事業内容のスリム化を図っていく必要があると思う。各単位 PTA では、事業のスリム化を目指しているところや、コロナで開催できなかったバザーのような事業を行っているところもある。一概では言えないが、無駄を減らしつつ子どもたちに還元できるような内容を考えていると思う。
- 家庭教育については、各家庭が抱える多様な悩みに対応するために、個々の事情に応じた仕組みを取り入れることが改善や課題解決につながるのではないか。統一的な方法だけではなく、それぞれの状況に適した工夫を考える必要がある。

(4) 複数の事業に共通する意見

- (ア)「出会い」
(イ)「継続」
- } 特記事項なし

(ウ)「つながり」

- 活動している学校で、秋にバザーを復活した。参加したい人たちが呼びかけ合って職員も含めて行っているが、青少年育成協議会や放課後子ども教室の先生方などが子どもたちのためにできるイベントも行った。また、OB・OGが母校に戻ってきて、かつて自分たちがしてもらったことをお返しするという流れは消えているわけではない。学校という場をベースに、そこに人やモノが集まってきて活性化できれば良い。
- 事業の展開については、生涯学習担当部局だけの対応は難しい。他の組織を巻き込んでいくことで、いろいろな見え方をしていくのではないかな。
- 昔ながらの人間関係が残っている場所として「学校」がある。先生が子どもに教えるという関係とは別に、子ども同士や先生同士の昔ながらの関係が残っている。そうした学校での人間関係を広げていくと良いかもしれない。PTAや地域の方たちが関わって学校の良い人間関係が地域に広がっていけば良い効果が生まれると思う。

(エ)「活かす」

- 市民活動と生涯学習活動とが重複、混在している印象がある。人材バンク事業で言うと、各課それぞれで集約がされていないと思う。分野ごとに行うこともできるかな。
- この会議の協議を反映させた事業展開については、冊子として報告書にまとめるだけでなく、広報などで市民に届ける、地域に発信することも必要だと思う。
- 実際に地域に発信されていない例は多くある。生涯学習側では分かっているけど地域との間で距離がある。何か良い方法で地域に発信するのが良いと思う。

3 協議を受けての事業展開について

新型コロナウイルス感染症は、令和5年5月から第5類感染症に移行し、長期間制限されていた社会活動が解放された。しかし、生涯学習の現場においては、コロナ禍以前より進行していた社会活動の停滞の兆しがコロナ禍によって加速され、その結果、現在でも教育機会や学習意欲の低下などさまざまな影響が残っている。

こうした状況の中、市の生涯学習施策においては、学びの継続や探求、学びを通じた人とのつながりなど、学びと活動の好循環の実現のための支援に課題があることが分かった。

この課題を踏まえ協議を重ねた結果、今回の協議テーマにある「生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し」を実現するための今後の事業展開について、生涯学習センターの3つの事業ごとに次に挙げる事業案を提案し、広報などの媒体を通じて広く市民に発信していこうとするものである。

なお、これらの提案の中には、社会教育委員会議の運営担当である文化部生涯学習課単独での展開が難しい内容のものも含めて記載していることを申し述べておく。

学習講座・学習情報・学習相談・人材バンク事業（キャンパスおだわら）

（1）市民ニーズの把握 ※視点 Point：「学びとの『出会い』の創出」

趣味や教養だけでなく、ボランティアや地域貢献につながる「学び」への転換を促すニーズ把握が生涯学習にとっては重要となる。現在も一定の情報収集は行われているが、今後も、様々な手法を組み合わせることで、多様な学習ニーズを多角的に捉えていくことで、効果的な生涯学習事業の提供につなげていく。

- ・アンケート調査、ワークショップ、相談窓口、その他各種の情報収集により、利用者の詳細、市民ニーズの把握を推進する。

（2）若年層を意識した企画の検討 ※視点 Point：「学びとの『出会い』の創出」

「学びの『継続』の支援」

人口減少と高齢化が進む時代、生涯学習施策においても、子ども、若者、また働く世代も含めた若年層を意識することが事業の持続可能性、地域の人材育成に向けて重要である。

- ・ユース（中学生・高校生・大学生）が楽しみながら企画や事業に参加できる場を提供する。
例えば「夏休み子どもおもしろ学校」の一部をユースが主導する企画枠として展開する。
- ・ICTとデジタル技術を活用し、学習効率を向上させる。
（例：オンライン講座やパブリックビューイングを活用した講座、インターネットや2次元バーコードによる講座申込のさらなる拡充）

（3）子ども向けイベントの拡張と親も楽しめる仕掛けづくり

※視点 Point：「学びとの『出会い』の創出」

「学びの『継続』の支援」

主に小学生を対象とした「夏休み子どもおもしろ学校」や、子ども限定ではないものの「キャンパス講師による1日体験講座」は参加希望者が多く、人気の講座は抽選になっている。子ども向けイベントに対するニーズは大きい。

- ・子ども向けイベントを長いスパンで実施し、継続的に開催する。
- ・子どもと親が共に参加できる体験型イベントの仕掛けを拡充する。
(例:親子で楽しむクッキングや職業体験、宝探しやビンゴを活用したゲーム型イベントなど)

(4)「愛着」の醸成・「郷土教育」の充実 ※視点 Point:「学びの『継続』の支援」

「学んだ成果を『活かす』支援」

生涯学習において「愛着」を持つことは「学びの継続」や充実感のために重要である。学習対象への愛着は、モチベーションを内側から支え、人生を豊かにする「生きがい」や「心の豊かさ」の元となる。知ること、交流することにより得られる気づきが、好きなことを長く続けてもらう原動力となり、地域づくり人材の育成、つまり「学んだ成果を活かす」ことにもつながる可能性がある。小田原は、歴史、自然、食べ物など多くの地域資産を有しており、それを
守り継いできた企業・団体などとも協力しながら市民全体で長期間かけて共有していくことができるポテンシャルを秘めている。

- ・郷土の自然や文化、なりわいを教材とした郷土教育の充実

【郷土教育としての具体的題材例】

食べ物（特産物・パン屋など）、小田原城を含めた歴史的建造物など

サークル・団体の支援、地区公民館支援

(5) 多様性を尊重した交流型・体験型の学びの実現

※視点 Point:「学びとの『出会い』の創出」

「学びを通しての『つながり』の支援」

現在、展開されている事業は、参加者の多様性に乏しい部分がある。多様な視点や経験を持つ人々が学び合い、交流することにより新しい価値の創造や地域コミュニティの活性化につながることもある。年齢、性別、国籍、障がいの有無、文化的背景等に関わらず、全ての人に生涯にわたる学びとの出会いの機会を提供するには、さまざまな世代のほか、ハンディキャップのある方など、これまでアプローチが不足していた人との共生が課題となるため、すでに
関係構築している国際交流関係機関・社会福祉関係機関・団体などと共に企画・運営することも必要と考える。

- ・障がいのある方と健常者が交流できる場を設置する。
- ・手足が不自由な状態を実体験できるワークショップの開催など、体験型学びを通じた新たな価値の共有を図る。

(6)「地区公民館」を利用した地域教育の可能性（「縁側」のような場所）

※視点 Point:「学びとの『出会い』の創出」

「学びを通しての『つながり』の支援」

地区公民館を地域の人々が集い「つながる」場として、さらなる活用を図る。

本市の地区公民館は、地域づくりや住民活動の促進のために、自治会等の住民が管理・運営する施設であり、地域に根ざした特性を持つとともに、自由度が高く柔軟な運営ができるという特性を併せ持っている。そこで、緩やかで気軽なフリースペースとして、いわば、「縁側」

のような人々の集いの場としての役割の可能性はある。このような場を地域の人々が集い「つながる」場として、さらなる活用を図る。

- ・市全域で展開される「キャンパスおだわら事業」のキャンパス講師による講座や「きらめき出前講座」を地区公民館で実施する。
- ・地区公民館において、地域に根ざした郷土芸能の伝承活動をしたり、防災・危機管理についての学びの場を提供する。

家庭教育学級・PTA研修

(7)「学校」をフィールドとした地域教育・家庭教育支援など

※視点 Point : 「学びを通しての『つながり』の支援」

「学んだ成果を『活かす』支援」

人間関係の希薄化が指摘されている中でも、昔ながらの一定のコミュニティが残されている場として「学校」が挙げられる。学校をフィールドとした地域教育は、単に知識を得る場としてだけでなく、地域社会の再構築や生涯学習社会の実現に向けた「開かれた学校づくり」の手法として注目されている。一方で、近年、働く親たちにとって、家庭教育にまつわる孤独感や悩みは深刻になっているので、そうした悩みに寄り添うような地域教育・家庭教育支援について、学校を舞台として展開していく可能性を考えていく。

- ・地域全体で家庭教育をサポートする仕組みを築き、地域交流を促進する。また、子どもたちが大人になった後、地域貢献をする視点を育てるような施策を展開する。
- ・PTA研修について、同じ講師による関連講座や過去の講座を共有し、次世代へつながる学びの場を提供する。
- ・これまで実施された研修会等の情報を一覧化、アーカイブ化、または動画化し、学校現場での活用を促す。

今期の研究・調査では、「出会い」「継続」「つながり」「活かす」の4つの要素をキーワードに「生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し」を探った。その結果、コロナ禍を経て、デジタル化の進展等により個人と個人のつながりが希薄になる現代において、学びをきっかけにつながり再接続し、地域の活性化や世代間交流につながるアプローチを進めていくことが求められていることを認識した。

これまでの協議内容を事業展開に反映させていくことを通じて、子どもから若者、シニアまで、様々な世代の人たちが主体的に学び、社会に関わる機会が生み出され、本市のまちづくりの目標のひとつである「未来を拓く人が育ち、地域の絆が結ばれる小田原」の創出にも貢献できると考える。

資料

今期小田原市社会教育委員会協議経過

	日 程	内 容
1	書面会議（令和6年9月）	社会教育委員の活動及び今後取り組む研究調査テーマについて（意見徴取）
2	令和6年11月28日（木）	今後取り組む研究調査テーマについて協議
3	令和7年3月18日（火）	生涯学習センター事業の現状と課題及び研究調査テーマを踏まえた協議【学習講座・学習情報・人材バンク（キャンパスおだわら）】
4	令和7年7月1日（火）	生涯学習センター事業の現状と課題及び研究調査テーマを踏まえた協議（サークル・団体の支援、地区公民館支援）
5	令和7年8月27日（水）	生涯学習センター事業の現状と課題及び研究調査テーマを踏まえた協議（家庭教育学級事業・PTA研修事業）
6	令和7年12月23日（火）	生涯学習センター事業の現状と課題及び研究調査テーマを踏まえた協議（生涯学習センター事業全般）
7	令和8年3月11日（水）	活動報告書素案について検討
8	令和8年5月29日（金）	活動報告書（案）について検討

小田原市社会教育委員名簿

任期：令和6年8月1日～令和8年7月31日

役 職	氏 名	区分	備 考
議 長	きむら ひであき 木 村 秀 昭	社会教育関係者	小田原市自治会総連合理事
副議長	ささい ひろみ 笹 井 宏 益	学識経験者	玉川大学学術研究所特任教授 文部科学省国立教育政策研究所フェロー
委 員	ありが かおる 有 賀 かおる	学校教育関係者	放課後子ども教室学習アドバイザー
〃	いし かわ や よい 石 川 弥 生	学校教育関係者	白鷗中学校校長 (R8.5～)
〃	いし づか かつ み 石 塚 勝 巳	社会教育関係者	小田原市 PTA 連絡協議会幹事 (～R8.4)
〃	うめ はら たから 梅 原 宝	社会教育関係者	小田原市 PTA 連絡協議会幹事 (R8.5～)
〃	か とう なお き 加 藤 直 樹	学校教育関係者	城南中学校校長 (～R7.3)
〃	か とう ま ゆ み 加 藤 まゆみ	学校教育関係者	前羽小学校校長 (～R7.3)
〃	さいとう ゆ か 齊 藤 ゆ か	学識経験者	神奈川大学人間科学部教授
〃	き し かよこ 佐 志 佳代子	家庭教育の向上に資 する活動を行う者	神奈川県小田原児童相談所所長 (R7.5～)
〃	き とう ち ひろ 佐 藤 千 尋	社会教育関係者	小田原市青少年健全育成連絡協議会監事 (R7.5～R8.4)
〃	たかはし まさのり 高 橋 正 則	社会教育関係者	公益財団法人小田原市体育協会副会長
〃	ひら い よし かず 平 井 良 一	社会教育関係者	小田原市青少年健全育成連絡協議会 副会長 (R8.5～)
〃	ふじ わら かつ ひこ 藤 原 克 彦	学校教育関係者	酒匂中学校校長 (R7.5～R8.3)
〃	まつもと としひろ 松 本 利 洋	社会教育関係者	小田原市青少年健全育成連絡協議会会計 (～R7.3)
〃	みの わ ま り 箕 輪 真 理	社会教育関係者	おだわら子ども防災 代表
〃	やました まさひろ 山 下 真 弘	家庭教育の向上に資 する活動を行う者	神奈川県小田原児童相談所所長 (～R7.3)
〃	やま だ あき こ 山 田 明 子	学校教育関係者	新玉小学校校長 (R7.5～)
〃	やまもと か よ 山 本 加 世	家庭教育の向上に資 する活動を行う者	NPO 法人 mama's hug 代表

・委員は五十音順（敬称略）。職名は、在任委員は令和8年5月現在、その他は在任当時のもの。

「4つの視点」ごとの意見・アイデア（まとめ）

No.	協議の視点		意見・アイデア		
			学習講座の収集・提供 学習情報の発信 人材バンクの運用・活用 （キャンパスおだわら）	団体活動の育成・支援 地区公民館支援	家庭教育支援 PTA研究集会
1	学びとの「出会い」の創出	1－① 最初に学びに出会うとき、興味や関心を高めてもらうにはどのように支援したらよいか 1－② 年齢や心身の状態にかかわらず、すべての人に学びとの出会いの機会を創出するためには何が必要か 1－③ 学ぶ余裕のない働く世代、子育て世代の機会を作るには何が必要かなど	・子ども対象事業の改善 1－①② → 親も面白そうだと思うような動機付け ・若年層や働く世代へのアプローチ 1－③ ・キャンパスおだわら情報誌の伝播 1－① → 申込方法の改良など ・「共感」や「共創」から生まれるつながりの支援 1－③ 3－①③④→「朝活」（早朝時間の活用等） ・講座の紹介、関連講座への誘い 1－① 2－① 3－① → 講師に宣伝方法を、参加者へはアクセスを働きかける。 ・動画の作成 1－① 2－① 2－②	・新規、子ども・若者の参加がしやすい戦略作り 1－②③ →若年層の自信につながる ・マネタリーの導入（見本市、手作り市を参考に） 1－① ・ハンディキャップのある方がトライしたいと思えること（ハードルを下げる） 1－② ・手足が不自由な状況の実地体験 1－② （ハンディキャップのある方への支援の糸口として） ・明確な目標を作る 1－① →「皆で何かを成し遂げる」というもの ・参加者のデータの把握 1－① （年齢層や市内外別などの把握）	・子どもと一緒に参加できる家庭教育学級 1－②③ 2－① ・家庭教育学級などの講師に関する情報共有化 1－②③ 2－① ・講師料軽減対策としての「きらめき出前講座」活用 1－② 2－① ・学校の必須行事に合わせて行政主導で開催する（千葉県松戸市の例） 1－②③ 2－① ・気軽に来てもらえるPTA 1－③ 2－①
2	学びの「継続」の支援	2－① 出会うことができた学びの「継続」をどのように支援するか 2－② 学びの成果を評価して、継続を促していくような仕組みをどのように作るかなど	・「愛着」を持ってもらう 2－① → 長期的な地域密着型「郷土教育」（歴史・自然のほか食べ物や生活など） ・子ども向けイベントの継続化（長スパン化） 2－② ・講座の紹介、関連講座への誘い 1－① 2－① 3－① → 講師に宣伝方法を、参加者へはアクセスを働きかける。 ・動画の作成 1－① 2－① 2－②	・体験型の増設 2－①② 4－② →実際に太鼓を叩く等、成功体験、親世代の体験も促す <u>イベント時に運営ボランティア体験の要素を盛り込む</u>	・講師料軽減対策としてのきらめき出前講座活用 1－② 2－① ・学校の必須行事に合わせて行政主導で開催する（千葉県松戸市の例） 1－②③ 2－① ・気軽に来てもらえるPTA 1－③ 2－① ・スクールボランティアの活用 2－① ・研修内容のアーカイブ化・各学校での活用 1－②③ 2－①
3	学びを通しての「つながり」の支援	3－① 学ぶことを通して知り合った仲間との「つながり」をどのように支援するか 3－② 学びを深めるため大学など他機関との連携をどのように考えるか 3－③ 形成されたサークルやグループの形成を促進するにはどのような支援が必要か 3－④ サークルやグループ同士の連携についてなど	・講座の紹介、関連講座の発信 1－① 2－① 3－① → 講師に宣伝方法を、参加者へはアクセスを働きかける。 ・さまざまなグループが一堂に会した集まり（「すぎなみ大人塾」の例） 3－①③④ ・団体同士の情報共有の場づくり 3－①②④ （写真・動画などを使用） ・「共感」や「共創」から生まれるつながりの支援 3－①③④ →「朝活」（早朝時間の活用など）	・公民館における女性同士の「茶飲会」 3－① →昭和に始まった社会教育の原点 ・地区公民館を「縁側のような場所」へ 3－①③ ・ミドル世代が仲間を作るプチ講座 3－①③ ・子どもと大人の仲介役としての「大学生」 3－② 4－① ・「大人塾」の例 3－①②④ →思わぬ価値やアイデアの可能性 ・インクルーシブの導入 3－① ・学校と地域のつながり（学校内の社会教育団体） 3－②	・学校運営協議会の活用 3－② 4－① ・学校をフィールドとした防災教育 3－② 4－① →ハードルを低くする ・学校で行われている講演会の活用 3－② 4－①→成人教育をカバー
4	学んだ成果を「活かす」支援	4－① 学んだことを個人の自己実現で終わらせず、まちづくりに活かすには何が必要か 4－② 一人ひとりが持っている学び（読書やスポーツ等）の楽しさを広く伝える方法についてなど	・団体主導による講座の企画 4－① （「郷土」などテーマを条件付けた上で）	・地区公民館と危機管理をつなげたイベント 4－① ・地区公民館を使った地域と講師のマッチング 4－① ・緩い運営による地区公民館 4－① ・子どもたちの主体的な取組み 4－①② →別の場所への交流や参画を希望 ・子どもと大人の仲介役としての「大学生」 3－② 4－① ・学生による子育て（サークル）支援 4－① 作品に対するアンケート⇄プレゼントの製作（若者が自分にもできることがあると気付く）	・（健民祭や敬老祭をきっかけに）中学生の地域活動支援 3－② 4－① ・地域で子どもたちを育てていくという視点（地域ぐるみの取組） 3－① 4－① ・「楽しかった」という記憶や思い出の醸成 4－①② →次世代への教育につながっていく

「生涯にわたる学びとの出会いと学びの継続、つながりの支援について」
～生涯学習の新たな出会いのつなぎ直し～

－ 協議報告書 －

令和 8 年 5 月

小田原市社会教育委員会議

編集・発行 小田原市文化部生涯学習課

〒250-8555 神奈川県小田原市荻窪 300 番地

電話 0465-33-1721